「ラディカル」であるかのように「相続」すること『ラディカル無神論』への注釈

小川歩人（大阪大学）[1]

○ はじめに

以下では、マーティン・ヘグルンドの『ラディカル無神論　デリダと生の時間』（*Radical Atheism Derrida and the Time of Life*, Stanford University Press, 2008／法制大学出版局、2017 年。以下、略号 RA の後に原著頁／邦訳頁を示す）が、デリダ研究においていかなる意義をもつのかについてコメントしたい。ヘグルンドは、本書のデリダ読解において、現前の形而上学が抱く神学的な不死の欲望を批判し、時間化と空間化＝間隔化の最中での有限な「生き延び survival」（への欲望）としての「ラディカル無神論 radical atheism」を提示した[2]。そして、そのような読解を、「原暴力」、「原エクリチュール」、「自己免疫」といったキーワードに注目しつつ、初期から後期まで一貫したテクスト読解のなかで説得的に示したことが、この本の評価に繋がっている[3]。本書は出版された当初に多くの書評やジャーナルでの特集の機会に恵まれ、今回の翻訳に際してもすでに訳者解説に加え、二本の書評が書かれている[4]。さらに言えば、本コメントは三人のデリダ研究者である訳者の解説の後にある。そのため、今回のコメントでは本書の概観は最小限にとどめたい。さしあたり概略的にデリダ研究における意義を述べておけば、主として以下の五点にまとめられるだろう。

1．英米圏を中心とした**過度に倫理的、宗教的なデリダ像の修正**をおこなった。

　→これについては英米圏に限らない議論の射程がある。

2．その際に、初期の時空間論から**存在論的（あるいは認識論的な）含意**を強く引き出

---

[1] ayutoogawa@gmail.com

[2] また、ヘグルンドは、The New Continental Review 誌のラディカル無神論特集において、ラディカル無神論が、無神論の三つのタイプ（メランコリックな無神論、プラグマティックな無神論、セラピー的な無神論）を批判するものであると述べている。Martin Hägglund “The Challenge of Radical Atheism: A Response”, *The New Centennial Review*, 9 (1), Spring 2009, pp. 227-252.

[3] マイケル・ナースは本書を評して、今までにないほどデリダのテクストをクリアに提示していると評している。Michael Naas, “An Atheism that (Dieu merci!) Still Leaves Something to be Desired”, *The New Centinental Review*, 9 (1), Spring 2009, pp. 45-68

[4] 最も重点的に特集が組まれた The New Centennial Review に加えて、Dagens Nyheter, Derrida Today, Diacritics, International Journal of Philosophical Studies, Journal of the British Society for Phenomenology, Journal for Cultural and Religious Theory, Lacuna, OEI, Parrhesia, Radical Philosophy, Site Magazine, Sophia: International Journal of Philosophy and Traditions, Studies in Social and Political Thought, The Year’s Work in Critical and Cultural Theory など、多数の学術誌で書評等が掲載された。また、コロックやパネルの主題としても話題となった。また、日本語で読むことができる書評としては、以下を参照のこと。星野太「自己免疫的な神とは何か　デリダから導き出される新たな「生」の哲学」、図書新聞、3325 号、2017 年 11 月 4 日; 立花史「デリダ哲学の数ある未来の一つ　マーティン・ヘグルンド著『ラディカル無神論　デリダと生の時間』を読む」、週間読書人、3203 号、2017 年 8 月 18 日。

した。→過度に言語論的なデリダ像の修正に資している（英米圏では、脱構築派の言語論的傾向に対する批判の文脈があり、2011 年の講演でそのような問題意識を述べている[5]）。

3．そして、そのような議論を、「生き延び」という観念を軸に、最初期から晩年まで、時空間論、欲望論、政治論を接続し、**デリダ哲学の一貫した読解方針**を提示した。→とりわけ中期のパフォーマティヴなテクストである「割礼告白」を検討した第４章は、初期の時空間論と生き延びの欲望についての議論を接続する貴重な読解。

4．また、**英米圏でのデリダ研究の網羅的な検討**になっており、本書の出版と同時におこった特集や書評を含め、英米圏の研究動向を知る上で有用。

5．以上のような内容を「注釈的というよりも、分析的」（RA, ii/23 頁）で**非常に明瞭な文体**で示した。

○ 『ラディカル無神論』の戦略について

本書が書かれた状況を踏まえた際に、その宛先が重要となるが、その主要な宛先はとりあえず以下の六つに整理できるだろう。

① 過度な「倫理的、宗教的デリダ」の信奉者への批判（ヘンス・デ・ヴリース、サイモン・クリッチリー等）

② ①のデリダの傾向に忌避感を表明する思想家たちへの問題提起（マラブー、ランシエール等）

③ 現代の**現象学者**からのデリダ批判への応答

④ **ラカン派**を背景とする欲望論への批判

⑤ **テクスト主義者、言語論的転回**に属する哲学者としてデリダを解釈する理論家への応答

⑥ 上記に当てはまりにくいが本書の理論構築を阻害する**デリダ派**への批判（ベニントン）

・ ③、④はすでにこれまでおこなわれてきた現象学、ラカン派精神分析に対するデリダ派的批判のコンパクトなまとめになっている。このことを考えれば、本書のラディカル無神論というテーゼを考えた際には、最も重要な批判は①であり、特に倫理的、宗教的哲学者としての「レヴィナス」とデリダを切り離すという論点が本書の骨子であるだろう。このヘグルンドの論点は、『時間嫌悪—時間と有限性についての試論』（2002）が出版された直後の発表「超越論的差別の必然性—デリダとレヴィナスを引き離す」から確認で

[5] “The Trace of Time and the Death of Life: Bergson, Heidegger, Derrida” (Keynote), MaMa Theory Institute, Zagreb, Croatia, June 18, 2011. Followed by a roundtable with Ray Brassier, Adrian Johnston, and Catherine Malabou.

きるものである。この戦略は「他者」や「責任」、「ユダヤ性」を扱った哲学者としてあまりに同一視されがちなデリダとレヴィナスの立場を切り離すために重要な役割をもっている[6]。

→その上で、レヴィナス的でない倫理的、政治的デリダの姿は否定しがたいのではないかという問題設定はありうる。Cf. 平和としての「aimance」という次元[7]。

→ただし、ヘグルンドによる問題提起は、「民主主義」、「正義」、「友愛」、「責任」といった語の選択から、単純にデリダのテクストにリベラルで倫理的なイメージを纏わせるのではなく、最初期の理論的賭金がどのように後期の政治思想に効いてきているのか。「倫理的デリダ」ないし「宗教的デリダ」のための論理はそれまでとは別様な形で練り上げられる必要があるだろう。

・ このような読解を主導するものは何か。様々な論点を貫くヘグルンドの明確な論点は、デリダの議論から、ある種の存在論的（認識論的）枠組み、ウルトラ超越論的条件としての時空間論を引き出すことであろう。

→本書は 60 年代、70 年代の時空間論を徹底させる前半部分の枠組みから後半部分の欲望論、政治的主体論を展開する構成として理解できる。

→この時、ヘグルンドのデリダ読解の特徴は、ガシェやステーテンを好意的に引用している一方で、「誤読の洗練されたバージョン」（RA212/41 頁）である⑤ ジェフリー・ベニントンに対する批判にみることができるのではないか。時間論と理念論という二つの側面からその批判は理解できる。

A. 時間論について

ヘグルンドはラディカル無神論的テーゼにおいて、全てを他化する暴力としての「時間の否定的無限」を原理に掲げている。このヘグルンドの立場に対して、時間（あるいは空間）を完全に形而上学的概念として退けねばならないとするベニントンのような立場

---

[6] ただし、詳細は渡名喜氏のコメントに譲りたいが、この企図を強調するため、デリダ、レヴィナス読解に無理が生じているところはある。たとえば、デリダとレヴィナスの差異化だけであれば、ヘグルンドが扱うべきは、『死を与える』、『動物である、ゆえに我あり』といった後期著作でも問題ないはずである。しかし、後期デリダのレヴィナスとの関わりだけではなく、「倫理的デリダ」に対する批判をも同時展開しようとするヘグルンドは、あくまで「暴力と形而上学」におけるデリダとの距離を強調し、更に言えば、デリダが評価していたはずの「他者の痕跡」に対する価値下げさえおこなっている。これはあまりに過剰である。

[7] 「むしろ還元不可能な約束として、そして本質的に非道具的なものである他者への関係の約束としての非暴力があると考えています。これは美しい平和的な関係の夢想ではなくて、今日では考えられず、西洋の友愛の歴史的制約の中では考えようのないある種の友愛の経験についての夢なのです。それは、私がエマンス *aimance* と呼ぶこともあるものですが、暴力を排除した友愛であります。暴力抜きで起こる他者への非独占的な関係であり、それに基づいて全ての暴力が区別され、規定されるのです」(『脱構築とプラグマティズム　来るべき民主主義』、法政大学出版局、160 頁)。最小の暴力でさえないような「夢」の身分は熟考すべきである。

は、デリダの議論と極めて親和性が高いことは否めない[8]。

→ただし、デリダの記述も両義的であり[9]、ここはデリダの両義性へ踏み込んだヘグルンドによる挑戦的な読解と言える。

B. 理念論について

ベニントンの立論は、ヘグルンドが指摘するように、デリダをカント的な理念から引き剝がしつつも、デリダの思考をカント的な理念の構造に即して読む読解モデルに依拠させがちである[10]。

→ヘグルンドは以下のように批判する。

「脱構築の論理に従うならば、絶対的なものは、世界内で実現することは不可能だが考えることは可能、というようなものではない。むしろ思考の最も形式的なレベルにおいてさえも、絶対的なものは不可能なのであり、この不可能性は理想に到達することのネガティヴな失敗などではない」（RA212/41 頁）。

→ベニントンの時空間論の忌避と、事実上の理念論的読解傾向と、がデリダ研究をあまりに晦渋で、不明瞭な記述に貶めているというのがヘグルンドの立場[11]。ベニントンが時間概念を形而上学的なものとして退けようとするのに対して、ヘグルンドは明示的に述べてはいないが、「形而上学や超越論的現象学」が「批判され、位置ずらしされる言語で」、あえて**古名の戦略**として「時間と空間の「根源的構成」」[12]についての議論をおこなっていると言えないだろうか。ここで、ヘグルンドの立場は、理念論を批判しつつ、あくまで超越論的感性論をウルトラ超越論的条件に高めるものであり（「時間の間隔化

---

[8] 「時間は現在性＝現前性としての存在から出発して考えられたものであり、もし何ものかが一時間と関係を持つが時間ではない何ものかが一現前性＝現在性という存在規定の彼方で考えられなくてはならないとすれば、その何ものかはなおも**時間**と呼びうるようなものではありえない」Jacques Derrida, *Marges─de la philosophie*, Minuit, 1972, p. 69 ;『哲学の余白』上巻、高橋允昭、藤本一勇訳、法政大学出版局、2007 年、124 頁。

[9] 例えば、ヘグルンドは「「**時間**」を現在に基づいて、また現前する存在者の自己への現前性に基づいて考えることはできない」という記述を取り上げている。Jacques Derrida, *La voix et le phénomène, Introduction au problème du signe dans la phénoménologie de Husserl*, PUF, 1967, p. 86;『声と現象』林好雄訳、ちくま学芸文庫、2005 年、96 頁。

[10] 「その思考の動きとは、興味深い仕方でデリダをカントに、それも〈理性〉の〈理念〉や〈崇高〉について述べるときのカントに（したがって後期リオタールにも）近づけるものである。こうした構造のデリダによる再定式化は、次のような言い方になる。すなわち、わたしたちはそれによってそのようなものを約束しているが、このことは以下のような意味、すなわち可能なもの（あるいは少なくとも幾分形式的な意味で思考可能なもの、例えば絶対的に新しいものや特有語法的なもの）がそれにもかかわらず不可能であるという意味を獲得することになっているのだ、と」。Geoffrey Bennington, *Other Analyses : Reading Philosophy*, Createspace, 2008, p, 172。

[11] このことは、例えば、逆向きに、スティグレールによる技術論へのデリダの差延の適用を経験的なものとみなして批判するベニントンの慎重さにも繋がる。Geoffrey Bennington, *Interrupting Derrida*, Routledge, 2000, p. 169.

[12] Jacques Derrida、前掲、p. 8/42 頁。

がウルトラ超越論的なステータスを持つのは、それが理想 the ideal にまでいたるあらゆるもの（理想自体も含む）の条件である」（RA19/38 頁））そのような読解によってラディカル無神論テーゼを成立させるのである。
→このような構成は、ガシェ、ロシオ・ブランサーナを参照しつつ、デリダ（あるいはヘグルンド）の「**ヘーゲル主義**」を際立たせることにも繋がっている。

・ **「相続」の問い**

このような読解は、デリダを裏切るものだろうか。秘教的なジャーゴンにとどまりがちなデリダの思想を開き、相矛盾する部分は、整理し、さらに発展させさえもする。そこに簡略化や無理があったとしても、この読解モデルがデリダの理解を推し進めるのであればその方が有意義であるという強い態度。「このような相続はもっともらしく教えを守ることによっては成しえない。それは、ただ教えを批判的に識別することを通してのみ可能なのである」（RA, p. 12/24 頁）。序文において示されるヘグルンドの戦略は、極めて意欲的なものであり、相続論のパフォーマティヴにもなっているだろう。

○ 問題提起

まずもって本書の敵は明確であり、冒頭のヘグルンドの戦略表明から明らかなように、そのために大鉈をふるった本であると言える。そのため、読解に無理が生じている部分、スローガンの繰り返しになっているところも多いが、あまり細かい批判をしてもしょうがないし、無い物ねだりをするのも的をえていないように思われる（例えば、精神分析読解や文学論は彼の他のテクストでおこなわれている作業である）。とはいえ、あまりにクリアな本書に対して警戒を抱く読者も多いはずであるので、以下では、読解上の無理がどこで生じているのかをデリダ読解の観点から幾らか指摘しつつ（それらはすべてデリダが明瞭に述べなかったとヘグルンドが指摘する場面から始まる）、ヘグルンドが発展させた「ラディカル無神論の論理に回収されない」側面からコメントを試みる。

① 「空間」について

ヘグルンドの時空間論は、デリダの「時間化は空間化であり、空間化は時間化である」定式に対する解釈である。ヘグルンドによれば、全てを否定する時間化の運動は、刻み込みとしての空間化を論理的に含んでおり、この超越論的時間と経験的空間との絡み合いが差延となる。これはデリダが書いていないことをヘグルンドが自覚的に展開しようと試みた議論である。

ヘーゲルの『自然学』およびデリダによる悪無限の評価への注目は適切であるが、しか

し、以下のようなヘグルンドの記述には注意すべきである。「デリダは時間の否定的無限を存在一般のための縮減不可能な条件であると述べている。我々はそれを、有限性が肯定的無限の中に尽きてしまうことは決してあり得ないということをはっきりさせるべく、無限の有限性と呼ぶことができる。各々の有限性は常に別の有限性によって超えられており、後者の有限性はさらに別の有限性によって超えられ…以下同様に［and so on］続く、といった具合なのだ（RA45/89 頁）

→デリダは、「幾何学の起源」「序説」において、「**以下同様に and so on**」**が導き入れる目的論**の影を鋭く指摘していた。「以下同様に」は「無限への抜け穴」を想定しているのだ[13]。そして、絶えず伝達の不安定さをこそ問題にしていたはずである。「意味の光が推移によってしか存在しないとすれば、それはこの光が途中で消滅することもありうる」のだ[14]。

→このようなデリダの発想を考えたときに、ヘグルンドは、空間を安定化、残存性として記述する傾向がある。「痕跡は必然的に空間的である。なぜなら、時間的な継起にかかわらずとどまりうるということが、空間性の特徴だからである。空間性とはそれゆえ綜合の条件である」（RA17/37 頁、強調引用者）。

→「序説」におけるデリダの立論は、超越論的歴史主義がもつ目的論的理念を危険にさらすものとして、物体としてのエクリチュールが要請されるというものだった。理念化には連続性を可能にするために「**空間化**」、「**書き込み**」**が必然的に要請されるが、それは継起を可能にする紐帯それ自体が偶然性に晒されているということと不可分である**。→1962 年の段階では、曖昧であるがこれは単に経験的なレベルの話をしているのではなく「**事実性**」の水準が重要となる[15]。

→この時、ヘグルンドの空間化による「継起の必然性」[16]という表現はどこまで維持できるだろうか。ここで、われわれは伝達内容の連続性、つまり破壊されうる単独性が連続されることを問題にしていない。ここで問われるべきは、「ウルトラ超越論的条件」である時間という原理それ自体の継起性はいかにして必然化されうるのかという点である。ヘグルン

---

[13] Jacques Derrida, *L'origine de la géométrie d'Edmund Husserl, Introduction et traduction*, PUF, 1962, p. 148; エトムント・フッサール『幾何学の起源』田島節夫、矢島忠夫、鈴木修一訳、青土社、1976 年、214 頁。

[14] ibid., p. 146/245 頁。

[15] のちのハイデガー論においても空間概念は散種、分散といった場面で論じられる。Jacques Derrida, *Psyché. Inventions de l'autre*, Galilée, 1987;「Geschlecht――性的差異、存在論的差異」『理想』、629 号、高橋允昭訳、1985 年。また初期デリダにおける事実性概念の位置付けについては以下の論考を参照。松田智裕「新たなものの出現としての出来事――デリダにおける出来事、偶然性、事実性をめぐって――」『フランス哲学・思想研究』、20 号、日仏哲学会、2015 年、270-280 頁。

[16] Martin Hägglund "Radical Atheist Materialism: A Critique of Meillassoux" in *The Speculative Turn Continental Materialism and Realism*, ed. Levi Bryant, Nick Srnicek and Graham Harman, re.press, p.120; 前掲、414 頁。

ドは、無思慮に継起を必然化する、ある種の（デリダに内在する留保なきヘーゲル主義とは別様の）「悪しき」ヘーゲル主義、デカルト的神学の再来なのではないか[17]。

② 「欲望」について

ヘグルンドは、デリダが体系的に論じなかった「欲望」についての概念を展開しようとしている。そのテーゼは、時間化と空間化の最中の有限な「生き延び」の欲望が、無限の不死への欲望を不可能なものにするというものだ。これにより、思考も欲望も不可能になるのだ。「私がラディカル無神論と呼ぶものは神の不在や不死性を否定するだけではなく、それらが望ましいものである［desirable］という想定に対しても反論する。むしろ私は、生き延びの時間が欲望されうるあらゆるもの［everything that can be desired］の無条件的な条件であると主張するのである」（RA48/95 頁）。

→しかし、「望ましくないもの［undesirable］」は「欲望できないもの［undesirable］」なのだろうか。ナースは『ラディカル無神論』に関する論文において、「友好的な代補」と言いながら「欲望-可能性［desire-ability］」についての問いをヘグルンドに投げかけている[18]。形而上学的、あるいは主権的幻想の「不可能性」をヘグルンドは繰り返し主張しているが不可能とはどのような意味なのか。そもそも「**時間**」と「**幻想**」**のつながり**を問題にせねばならないのではないか。「機械状化する、自-動化するー自己触発であると同時に異他触発的なーこの自律化は、少なくともアナロジー的に、主権と呼ばれるものと無関係ではなく、ともかくそのファンタスムの権能、［……］同じものを他なるものに押し付けるファンタスムの力、無条件の自己-規定という全能と無関係ではない」のである[19]。

→とりわけカント論の可能性としては超越論的構想力のテーマ。これは 1968 年の『グラマトロジーについて』おけるルソー論から、1974 年の『弔鐘』、1990 年の『マルクスの亡霊たち』を経て、最晩年の『獣と主権者』（2001 年-2003 年）にまで繋がるもの。

→これはハイデガーの『カントと形而上学の問題』における自己触発と超越論的構想力の問題を引き受けつつ、想像力、幻想、自己触発、幽霊的な時間といったようにデリダが様々な形で展開していったモチーフである。

---

[17] このような主題は、60 年代から様々なテクストにみられる。例えば、以下を参照。「[……]危機は、最終的には、その内在的[…]起源を諸部分のあいだの必然的連結の不在として、諸瞬間のあいだの移行の偶然性および不連続性としての時間そのもののうちに有していたと言えるだろう。*L'écriture et la différence*, Seuil, 1967, p. 89;『エクリチュールと差異』合田正人、谷口博史訳、法政大学出版局、2013 年、113 頁。

[18] Michael Naas, “An Atheism that (Dieu merci!) Still Leaves Something to be Desired”, *The New Centinental Review*, 9 (1), Spring 2009, pp. 45-68.

[19] Jacques Derrida, *Séminaire: La bête et le souverain, volume 2 (2002-2003)*, ed. Michel Lisse, Marie-Louise Mallet, Ginette Michaud, Galilée, 2010, p. 124; 『獣と主権者 II（ジャック・デリダ講義録）』西山雄二・亀井大輔・荒金直人・佐藤嘉幸訳、白水社、2016 年、110 頁。

→また、そもそも「生き延びを欲望する」ことは、「不死を欲望する」ことと完全に切り離されているのか。「有限な特異性を愛すること」と、「それを引き止めようとすること」は紙一重であり、そこには「現前を欲望すること」との密接な関連があるのではないか（Cf.『エクリチュールと差異』所収のアルトー論）。欲望の成就の構造的不可能性にも関わらず、イデオロギー的な幻想の只中において、構成されるものにこそデリダは注目していなかったか。ヘグルンドは、「**準-超越論的 quasi-transcendental**」ではなく「ウルトラ超越論的」という語を選択した（RA211/39 頁）。紛い物の超越論的論理は構築主義的、テクスト主義的な、悪しきポストモダニズムの権化としてのデリダを想起させるだろうか。しかし、準-超越論的なものは、ラディカル無神論の論理に回収されない残余として、デリダの他なる論理を示しているように思われる。

③ 「否定神学」について

本書の重要な論点は否定神学批判である。ただし、ヘグルンドが「否定神学」と名指さしているものの射程は正しく考えられなければならない。ヘグルンドの「否定神学」は、基本的にはラディカル無神論が前提とする時間の否定的無限に対置される存在の彼方の「肯定的無限」を温存する態度である。

しかし、デリダにおいては「**否定神学とはひとつのジャンルではない**」[20]。そして、さらに言えばデリダは否定神学というものをある種の徹底的な形式性として理解している[21]。そこで問題となるのは、充溢とは異なる形式的空虚さであるだろう。しかし、ヘグルンドの否定神学批判は基本的には「充溢という理想」を狙っている。この点はミスリーディングではないか。

われわれはデリダの「超越論的シニフィエ」と「超越論的シニフィアン」に対する二つの異なる戦略を区別する必要がある。これをわかりやすく整理すれば、充溢した現前に対する批判と、空虚なシニフィアンの無謬性に対する批判であり、ヘグルンドには端的に言って前者に対する批判しかおこなっていないようにみえる[22]。

---

[20] Jacques Derrida, *Sauf le nom*, Galilée, 1992, p. 27;『名を救う』小林康夫・西山雄二訳、未來社、2005 年、20 頁。

[21] ibid., p. 28/20 頁。

[22] 『絵葉書』所収の「送付」、「真理の配達人」を参照。Jacques Derrida, *La carte postale − de Socrate à Freud et au-delà,* Flammarion, 1980; 『絵葉書 I ——ソクラテスからフロイトへ、そしてその彼方』若森栄樹・大西雅一郎訳、水声社、2007 年；「真実の配達人」清水正・豊崎光一訳、『現代思想』1982 年 2 月臨時増刊号「デリダ読本」。この論点に注目したデリダ読解としては下記を参照。東浩紀『存在論的、郵便的—ジャック・デリダについて』、新潮社、1999 年。

また、この観点を鑑みた時、ヘグルンドによるラクラウについての批判は再検討される必要がある。充溢の不可能性をてこにして、変革を図ろうとする戦略自体にはデリダは異を唱えていない。むしろ、ラクラウに対して、展開されるべきデリダ派的批判は空虚なシニフィアンを

さらに言えば、このような対置をした上で、否定的無限たる時間の運動にすべからく全ての存在者が巻き込まれているということ、ヘグルンドの議論はそれ自体「否定神学」の形式に十分近い。ここでヘグルンドは別の罠にかかってはいないだろうか。つまり、超越論的シニフィアンに対する批判が不在であるために、ヘグルンドの議論は、ここで決して充実することのない空虚を用いる「ラカン派」に対する批判を捉え損ねており、さらに言えば、現前以前の命運、世界化、贈与を主題とするハイデガーとデリダとの差異を論点として析出できない[23]。デリダのハイデガー（そして、フッサール、ヘーゲル、ラカン）批判の射程は、現前ではなく、超越論的な単一の歴史性、存在の歴史への批判という側面を持つ。ここで、ウルトラ超越論的条件としての時間は、いかにして超越論的な歴史性の単一性から免れているのか。生き延びは果たして「諸力の差異」に晒されているのか。倫理的転回を認めず、宗教的、倫理的デリダに対する批判を初期から一貫しようとする「ラディカル無神論」の戦略は極めて重要である。しかし、そこで提出される戦略は、デリダの戦略の機微を隠蔽するものであってはならないはずだ。

○ 終わりに

以上、可能な限り、ヘグルンドの論点に寄り添いつつ、彼のデリダ読解の射程について、主として哲学的文脈からの検討をおこなった。この他にもさまざまな論者が、本書について、あるいはその後の *Dying for Time* について議論をおこなっており、そちらも参照していただければ幸いである[24]。

デリダの思考が「あたかも」最初から最後までまったきラディカル無神論であった「かのように」提示する行為遂行的テクストをどのように理解するのか。これ以後のデリダの遺産相続人たちはモデルを再生産し続けるコピーではなく、このあまりにコンスタティヴなパフォーマティヴに応答せ「ねばならない」だろう。パフォーマティヴとは力であり[25]、

用いるポピュリズム的戦略が結局のところその内実を問わないこと、その空虚な連帯の強固さが招く帰結こそを疑うべきであるのではないか。それなしには、単なるドグマティックで形式的な批判にしかならないだろう。そして、再検討のためには本書で言及されるネグリ／ハートの「マルチチュード」とラクラウ／ムフの「ヘゲモニー」（さらにバディウの「出来事」とも別様に）のあいだの論理を考える必要があるように思われる。

[23] 少なくとも、ヘグルンドは以下の講演において、ハイデガーを「ウーシアとグランメー」の粗雑な読解から存在を現前として扱った哲学者として処理している。“The Trace of Time and the Death of Life: Bergson, Heidegger, Derrida” (Keynote), MaMa Theory Institute, Zagreb, Croatia, June 18, 2011. しかし、ハイデガーのプロジェクトは、デリダにとって「まだ Anwesen でさえないような Wesen によって思考を全面的に動揺させる」ものとして考えられていたはずである。Jacques Derrida、前掲、p. 75/132 頁。

[24] *Derrida Today* vol.6 issue2 では、*Dying for time: Proust ,Woolf, Nabokov*, Harvard University Press, 2012 についての特集が組まれている。

[25] Jacques Derrida、前掲、p. 383; （「署名　出来事　コンテクスト」『有限責任会社』、法政大

ラディカル無神論はその力をわれわれに示している。北欧から到来したラディカル無神論の傍ら、われわれがいかに遺産を相続してきたのか／いくのかを吟味せねばならないだろう。

学出版局、高橋哲哉、増田一夫、宮崎裕助訳、2002 年、35 頁)。